2022 年度 ベトナム研修 報告書

医療科学部　放射線技術学科　３回生　　織田　朝美

2023 年 3 月 12 - 23 日に参加したベトナム研修について報告する．今回の研修では主に国立チョーライ病院での臨床実習，タンアン総合病院の見学，フエ医科薬科大学との交流プログラムを行った．

本研修に参加した目的

私たちの学年は，新型コロナウイルス感染症の影響で 2 年次の病院実習が中止になった．そのため，病院実習を経験していない自分に対し，不安や焦りを感じていた．学生生活が残り僅かであるにも関わらず，自分が診療放射線技師として病院で働く姿が想像できず，日々の勉学や就職活動に対するモチベーションが低下していた．目標を見失ったまま日々を漫然と過ごしている自分に強い危機感を覚えながらも，現状に甘んじている自分を変えるためにこの研修に参加した．自分が憧れていた病院実習を経験できることに心を躍らせ，積極的な学びを実践しようと思い，今回の研修に臨んだ．

病院実習で学んだこと

一般撮影では，胸部撮影のポジショニングと患者さんへの接遇を体験した．患者さんの生死をも決めかねない放射線画像検査に自分が関わることに対して大きな責任を感じた．検査後に患者さんの笑顔を見たときに，自分が患者さんの役に立てたことを実感した．実際の検査を体験したことで，全ての検査画像に責任を持つ重要性を学ぶことができた．強い責任感を持ち，担当患者さんが笑顔になれるような診療放射線技師になりたいと思った．

マンモグラフィでは患者さんへの声掛けの大切さを学んだ．先方の診療放射線技師の方は，検査中に患者さんに積極的に声掛けをすることで，不安を和らげながら検査を進めていた．患者さんの協力を得るためには，患者さんの緊張や不安を和らげる声掛けが効果的だと感じた．

MRI ではモーションアーチファクトへの対応を学ぶことができた．患者さんに動かないように声を掛け，アーチファクトが出現したシーケンスを再撮影した．講義で学んだモーションアーチファクトへの対処法を実臨床で実践でき，貴重な経験になった．撮像した画像を確認しながら検査を進める重要性を学ぶことができた．

患者さんを中心とした医療

チョーライ病院には地方病院で対応できない患者が多く来院するため，朝早くから受付に行列ができ，待合室は患者で溢れかえっていた．遠方から来院する患者が早く帰れるようにスムーズな検査が行われていた．

タンアン総合病院は，私立の医療機関であり，国民保険の適応が限定的であることから，一部の富裕層しか利用できないため，チョーライ病院ほど混雑していなかった．また，最新の医療を提供するために，日本に数台しか設置されていない立位 MRI が導入されていた．検査室の壁は綺麗な景色が描かれ，リラックスして検査を受け

てもらうための工夫がみられた．また，CT と MRI の検査室を隣り合わせにすることで，患者さんの導線をスムーズにする工夫もされていた．

患者さんを中心とした医療を提供するために，それぞれの病院の特色を活かした工夫が行われていた．患者さんに快適な検査や治療を提供したいという思いは，日本もベトナムも同じであると感じた．

人との出会いを大切にする

研修の最後に「いつでもチョーライ病院に帰っておいで」とチョーライ病院の診療放射線技師の方から声を掛けていただいた．温かく私たちを迎え入れてくださったことに対し，今回お世話になった方々に心から感謝を伝えることができた．研修開始時は，初めてのベトナムや病院実習に不安や緊張を感じていたが，診療放射線技師の方が検査について丁寧に教えてくださったおかげで緊張がほぐれ，自分から積極的に質問できるようになった．

本研修は 2016 年から始まり，相互交流を通して先生方や先輩方が良好な関係を築いてこられたことを伺った．これまでに諸先輩方がベトナムでの出会いを大切にしてきたことで，私たちも温かく迎え入れていただけたことを知り，この貴重な機会を作っていただいたすべての方に対して感謝の気持ちでいっぱいになった．今回のベトナム研修だけでなく，日常生活での出会いを大切にし，何事に対しても常に感謝の心を持てるようになりたいと思った．

環境のせいにするのではなく自分を変える

フエ医科薬科大学の学生は，各モダリティの基礎知識だけではなく，検査室内の案内や検査説明についても詳しく，診療放射線技師の方に積極的に質問をしていた．講義の内容を臨床と繋げて理解していることが，実践的な実習を可能にしていると思った．2 年次の病院実習中止を自身の知識不足の言い訳にしてきたが，先方の学生の勉学に対する姿勢を見て，自分の勉学への取り組み方がいい加減だったと痛感した．臨床実習を経験できていなかったことをネガティブに捉えるのではなく，むしろ原動力にして勉学に取り組もうと思った．環境のせいにするのではなく，自分が置かれた状況でできることを考え，実際に行動することが大切だと感じた．これからの人生で多くの逆境を経験すると思うが，逆境を活かして成長できる人間になりたい．

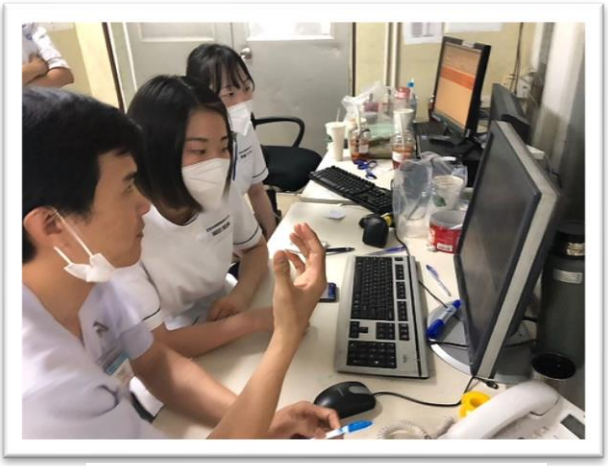
今後

臨床でどのように役立つ知識なのか，機器の操作によってどのような影響が検査や患者さんに及ぶのかを考えて授業内容を学び直したいと思った．基礎知識を蓄えて今後の臨床実習に臨み，新たに得る知識を確実に自分の血肉にしようと思う．患者さんの不安や緊張を少しでも和らげ，患者さんを笑顔にできるような診療放射線技師になりたいという気持ちを忘れずに勉学に邁進したいと思う．

医療の発展は日進月歩であり，医療従事者は不断の勉強が必要だと感じた．診療放射線技師として臨床に出てからも，自分ができることを考えて向上心を絶やさずに学び続けたいと思う．勉強会，研究会，学会に積極的に参加し，自身の学びを患者さんに還元したい．また，先方の学生の勤勉さに触れたことで，環境のせいにするのではなく，考え方を変えることが今の自分に必要であることが分かった．自分の可能性に蓋をするのではなく様々なことに挑戦する人生を送りたい．

先生方がベトナムの診療放射線技師の方と医療技術や機器について話されているのを見て，他国の医療技術に興味を持った．将来的には診療放射線技師として海外で医療技術を学びたいと思った．

最後に今回の研修環境を整え，引率してくださいました京都医療科学大学の松尾悟先生，水田正芳先生，霜村康平先生，石田翔太先生に深くお礼申し上げます．並びに，このような素晴らしい機会を与えてくださいました国立チョーライ病院，タンアン総合病院，フエ医科薬科大学の皆様に感謝申し上げます．



国立チョーライ病院での臨床実習

国立チョーライ病院研修修了式

温かいチョーライ病院の皆様

フエ医科薬科大学での研修

フエの学生との交流

胃袋を掴まれたブンボーフエ

ホーチミンのフットマッサージ

ベトナムの空港で見つけた素敵な言葉

2022 年度 ベトナム研修 報告書

医療科学部　放射線技術学科　3 回生　　齊藤 さやか

2023 年 3 月 12 日から 23 日までの 12 日間、ベトナムへの海外研修に参加させていただきました。この研修では、主にチョーライ病院での臨床実習とフエ医科薬科大学との学生交流を行いました。

〈 研修参加の目的 〉

私は新型コロナウイルス感染症の流行と共に大学に入学した世代の 1 人です。さまざまな感染対策によって大学生活は大きく制限されました。毎日同じことを繰り返す日々が続き、いつの間にか「ありたい自分」が分からなくなっていました。自分の当たり前が通用しない環境でいろいろな価値観に触れ、自分が「本当に大切にしたいこと」を見つけたいと思い、この海外研修に参加しました。私たちの学年は新型コロナウイルス感染症の影響で、2 回生の臨床実習が中止になりました。初めての病院実習を人生初の海外で受けることや、「日本語が通じない環境で生きられるか」「トラブルに巻き込まれないか」など未知の体験への不安がありました。しかし、ベトナムでの経験や出会いへの期待感が強く、新たな一歩を踏み出す機会にできると思いました。

▲ 研修メンバー全員での集合写真

〈 研修で学んだこと 〉

・表現すること

ベトナムでは、私たちが少数派の「外国人」という、日本での生活とは逆の立場を経験しました。関西空港からホーチミン市に到着すると、日本とは全く異なる世界が広がっており、異国に来たことを実感しました。道路はバイクで溢れかえり、街にはクラクションが鳴り響いていました。信号機や横断歩道がほとんどないため、道路を渡るだけでも一苦労でした。現地の方々と関わる機会はたくさんありましたが、普段と違う景色や人々、日本語が通じない環境で常に胸が騒いでいました。

ベトナムの方々は、英語が苦手な私でも歓迎の気持ちがわかるくらい親切にしていただきました。私たちの名刺を受け取ると、

▲ ベトナムの街

手に名前を書いて試行錯誤して覚えてくれる人もいました。ジェスチャーを使いながら笑顔で話してくださり、感情表現豊かで暖かい人ばかりでした。言葉は通じなくても、「**表現すること**」で気持ちは伝わることを学びました。今回の研修参加者の全員が英語を上手に話せるわけではなく、分からないなりに知っている単語を使い、その場の雰囲気や勢いで会話を成立させていました。最初、私は英語でコミュニケーションをとることへの緊張や躊躇があり、周りの様子をただ見ているだけのことも多かったです。しかし、他の研修参加者が楽しそうに交流する姿を見て、私も徐々に楽しくなりました。自分の感情や思いは表現しないと何も始まらないため、何事も失敗を恐れずに挑戦する大切さを学びました。

・感謝すること

ホーチミン市では、チョーライ病院（公的医療機関）とタンアン総合病院（私立医療機関）で臨床実習を行いました。チョーライ病院は毎日多くの患者で混雑していました。病床稼働率が140%前後の状況が続いており、医療機器や医療スタッフが不足しているようでした。特に、一般撮影では驚くことが多かったです。1つの検査が終わると、検査室内から患者が退出する前に次の患者が入室していました。また、ポジショニングの際には、検査担当の技師が患者とあまりコミュニケーションを取らずに体位変換していたことが印象的でした。患者数が非常に多く、検査効率を最優先に考える姿勢が行動に表れていると思いました。

▲ 臨床実習 1

一方、タンアン総合病院はあまり混雑しておらず、このような光景は見られませんでした。施設は綺麗で、最新の医療機器が導入されていました。チョーライ病院とは異なる点が非常に多く、同じ地域の病院でも環境が大きく違うことに驚きました。ベトナムの私立医療機関は公的医療機関と違い、国の医療保険の適応はほとんどありません。そのため、医療サービスの価格が高く、一部の富裕層しか利用できない状況にあることを帰国後に調べて初めて知りました。日本では保険証があれば、どの医療機関においても、窓口負担だけで診療や薬の給付などの医療サービスを受けられます。このように、いつでも、誰でも、平等に医療を受けられることは当たり前だと思っていましたが、ベトナムの保険制度を知り、自身が非常に恵まれた環境にいることを実感しました。便利で、快適で、何不自由ない生活を送れる毎日に感謝して生きたいと思いました。

▲ 臨床実習 2

・知ること

フエ医科薬科大学との学生交流を通して、ベトナムについて多くを教えていただきました。フエ市はベトナム最後の王朝、グエン朝の都として栄えた古都です。歴史ある建造物が数多く残されており、その建造物群はベトナム初の世界遺産に登録されました。私たちは、フエ医科薬科大学の学生が運転するバイクに乗り、たくさんの観光地を案内してもらいました。特に、八角七重の塔が象徴的な「ティエンムー寺」が印象に残っています。敷地内に

▲ ティエンムー寺とフエ医科薬科大学の学生

広がる美しい庭園には仏像や大きな鐘楼が展示されており、先方の学生が丁寧に説明してくれました。ベトナムの伝統的な民族衣装である「アオザイ」を着て写真を撮っている人もいました。この寺院から、フエの旧市街と新市街を二分して流れる「フォン川」を一望することができます。夕日に照らされ、オレンジ色に染まるフォン川の姿は一生忘れられないほどの景色でした。

私たちはお世話になった方々との交流を深めるためにパーティーを開きました。パーティーはお互いの人柄や特徴を知る重要な機会になりました。そこでは、日本文化の紹介として「ソーラン節」を踊りました。たくさん練習を重ねた甲斐もあり、ベトナムの方々に喜んでもらえました。ベトナムの方たちは自国の文化や歴史を深く理解し、自分の国に誇りを持っているように感じました。彼らから、何度も日本に関する質問を受けました。しかし、私は日本人であるにも関わらず、ベトナムの方々に日本の文化や歴史を説明できませんでした。自分を大切にできない人は周りの人を大切にできないように、自国の文化を大切にできない人は他国の文化を大切にできないと思いました。他の国を深く知るために、まずは日本について深く知りたいと思いました。

▲ パーティーの様子

▲ ソーラン節

〈 研修を終えて 〉

ベトナム研修は挑戦の連続でしたが、異なる価値観の方たちと関わることで自分の新たな一面に気付き、視野が広がったと感じました。これまでの私は、自分の考えや気持ちよりも、周りにどう思われるかを優先し、世間の「常識」や「当たり前」にとらわれて生きてきました。何が正解か、これをしたら恥をかくのではないかなど、周りからの評価に依存していました。ベトナムで様々な方に出会い、一人一人がそれぞれ「自分の人生」を生きていることを実感しました。これまでは「普通」にこだわり過ぎていましたが、人と同じことが必ずしも正解ではないと考えられるようになりました。ベトナムでの経験は、自分で動き、自分の目で見て、自分の心で感じたからこそ得られたものだと思います。「自分の選択」の積み重ねによって「今の自分」が存在します。これからは周囲の意見に左右されずに挑戦を続け、「自分の人生」を生きたいです。そして、勝手に自分の限界を決めて諦めず、自分の可能性を信じて進んでいきます。

〈 謝辞 〉

今回のベトナム研修では多くの方々のサポートにより、トラブルに巻き込まれることもなく元気に帰国できました。引率していただいた松尾先生、水田先生、霜村先生、石田先生、および研修を共にした仲間のおかげで 12 日間の研修を乗り越えられました。本当にありがとうございました。また、お忙しいところ快く受け入れていただいたチョーライ病院とフエ医科薬科大学の皆様に心から感謝致します。最後に、今回のベトナム研修に関わってくださった全ての方々に感謝申し上げます。

2022 年度 ベトナム研修 報告書

医療科学部　放射線技術学科　３回生　　佐藤　彩乃

はじめに

2023 年 3 月 12 日から 23 日までの 12 日間，ベトナムでの海外研修に参加した．この研修に参加した目的は，言語や文化の異なる国で，価値観や習慣の変化に対応できる力を身に付け，行動力と思考力を磨くとともに知見を広げることであった．チョーライ病院での病院実習とフエ医科薬科大学での国際交流プログラムを通し，本研修で学んだことについて報告する．

ホーチミン市

ホーチミン市はベトナム南部に位置する．熱帯気候で平均気温 32℃，平均湿度 75%と蒸し暑い気候であった．12 月から 4 月は乾期のため研修期間中は全く雨が降らず，僅かな移動でもすぐに汗をかく暑さであった．

道路はバイクで溢れ，クラクションが鳴り響いていた．日本にない光景に驚きと不安を強く感じた．横断歩道や大きい交差点でさえ信号はほとんどなく，その中をバイクは車両を停止することなく巧みに歩行者を避けていた．初めは恐怖で道路を渡ることが困難であったが、3 日ほど経つと現地の交通量にも慣れ，道路を横断できるようになった．

チョーライ病院での研修

ホテルからチョーライ病院までは徒歩約 1 分ととても近かったが，交通量の多い道路を横断する必要があった．横断に不安を持っていたがスタッフの方が毎日引率してくださったため，安全に病院とホテルを往復できた．。研修中以外でも私たちのことを気に掛けてくださり，安心して研修期間を過ごせたことに深く感謝している．

病院内は決して衛生的ではない環境であり，廊下には多くの患者さんが検査を待ち，中には横たわる患者さんや重度の外傷患者さんも一緒に検査を待っておられた．一般撮影の 1 日の検査数は 2000 件以上と非常に多く，効率を重視して検査していた．特に，撮影中に検査室のドアを閉めず，他の患者さんが自由に検査室内に入室できる状態であったことが気になった．技師の方々は個人被

曝線量計をつけておらず，日本よりも被曝を気にしていないように思われた．日本は被爆国であるため，放射線に対して不安に思う患者さんが多いが，ベトナムでは放射線に対する不安をもつ患者さんは少ないことを知った．多くの検査を正確に素早く進めるために，手間を減らして検査の待ち時間を短縮しておられた．

一般撮影では胸部撮影のポジショニングを経験させていただいた．多忙にも関わらず，約 50 人もの患者さんにジェスチャーで体位を伝え，ポジショニングさせていただいた．これまで座学で学んだ撮影技術学は，実践によって理解が深まることが多くあり，今後の病院実習にも活かせる実践的な知識を学ぶことができた．

MRI の実習では，患者さんの頭部の固定やヘッドホンの装着，位置合わせ，患者情報の入力や画像処理を経験させていただいた．わからないことを技師の方が丁寧に教えてくださったが，自身の知識不足に対する悔しさとともに，勉学に励む意欲が湧いた．

マンモグラフィーの実習では MLO と CC のポジショニングをさせていただいた．初めての経験でポジショニングに時間を要し，患者さんに申し訳ない思いであったが，「頑張ってね」と声をかけてくださる患者さんもいた．実践することで撮影の流れや方法を把握しながら検査を進めることができた．痛みや羞恥心を伴う検査にも関わらずポジショニングさせていただき，非常に貴重な経験になった．

チョーライ病院の実習は，技師の方々が質問に丁寧に答えてくださり，検査を実践させてくださったため，診療放射線技師としての患者さんに対する接し方や検査の基本的な流れを理解することができた．実習では積極的に挑戦することが大切であり，またそれが自身の成長に繋がると実感した．

チョーライ病院にはホーチミン医科薬科大学の学生も病院実習に来ており，実習期間中その学生たちに検査の進め方や装置の使い方を教えてもらい一緒に実習に取り組んだ．ベトナムの学生は，曝射や静脈のルート確保ができ，自身と同学年の学生が手際よく装置の操作や患者さんの誘導をしている姿はとても端正であった．彼らと夕食や観光に出かけ，ベトナムの文化や観光地を教えてもらった．実習中にも関わらず，親切にもてなしてくれ，彼らとの交流はプログラムになかったが，5 日間の実習を共にし仲を深めることができ素敵な思い出となった．

私は研修 5 日目に発熱し，チョーライ病院で診察をしていただいた．チョーライ病院のスタッフが付き添ってくださり，安心して診察を受けることができた．診察室や医師による問診は日本と変わらなかった．その後 2 日間は病院研修に参加できなかったが，ベトナムでの受診は貴重な経験になった．先生方や友人たちの看病のおかげで体調は回復し，研修を再開できた．支えてくださった先生方や友人たちに感謝したい．この経験を通して，予期せぬ事態に備えることが大事だと感じた．そして，医療従事者として日々周囲の方の様子を伺い，人助けに繋げたいと思った．

メコン川ツアー

全長 4000km 以上ある東南アジア最長のメコン川は，中国，ミャンマー，ラオス，タイ，カンボジア，ベトナムの 6 ヵ国を流れている国際河川である．河川には多くの生物が生息しており，この地域に暮らす人々の食料として，人々の生活を豊かにしている．

このツアーで小さな手漕ぎボートに乗り，ここで暮らす人々の穏やかな生活を見ることができた．同じツアーに参加した日本の方や食事の場で同じテーブルになった海外の方とも仲良くなった．日本ではできない経験ができて新しい感覚のツアーであった．

フエ市

ベトナム中部に位置するフエ市は，最高気温が 40℃近く湿度は約 80%あり，ホーチミン市よりもさらにじめじめとしていた．フエ市には数多くの歴史的建造物やユネスコの世界遺産に登録されている建物，無形文化遺産に登録されている雅楽があり，多くの歴史を感じる都市であった．また，ホーチミン市よりも自然が多く，静かで落ち着いた街であった．

フエ医科薬科大学での研修

フエ医科薬科大学附属病院では，CT・MRI・一般撮影を見学した．チョーライ病院同様，学生による曝射や静脈注射が行われていた．見学の際に案内してくれた学生が，診療画像機器学で学んだことを中心に問題を出してくれた．現地の学生は，座学より実技で学ぶことが多く，臨床の知識が豊富だった．私は，4 回生の病院実習に行くまでに診療画像機器学の基礎をしっかり学び直す必要があると実感した．その他に，フエ医科薬科大学の先生による英語での講義を受けた．この講義では知らない英単語を調べることに精一杯で，英語力の無さに悔しさを感じ，英語をもっと勉強したいと思った．

フエ医科薬科大学の学生との交流

初日の welcome party でフエ医科薬科大学の学生たちと顔合わせをした．初めは互いに緊張し，会話がひと段落すると無言の間があったが，一緒にご飯を食べ，共通の話題で仲を深めることができた．

次の日からは彼らのバイクにて移動し，昼食や観光に案内してもらった．乗せてくれた学生が観光地を案内しながら運転してくれたため，バイクに乗っている間もコミュニケーションをとることができた．バイクで移動することによってさらに現地学生との距離が縮まったと感じた．

まとめ

12 日間の研修で，行動力・思考力を磨くことが達成できた．言語が異なるため，工夫して意思疎通を図り，積極的に伝えようとする姿勢が身に付き，自信を持つことにも繋がった．現地の方々は，初めての環境に慣れない私にベトナムを満喫してほしい・楽しめるように，と思いやりと親しみを持って接してくださった．心温まる想いを感じ，自身のことで精一杯にならず常に相手のことを気にかけて行動できる人になろうと思った．現地の学生だけではなく，共に研修に参加した友人との絆も深まった．全員でサポートし合ったことで，この研修を乗り越えることができた．

謝辞

引率してくださった生方，お世話になった各施設の方々，先方の学生，そして 12 日間を共に過ごした友人たちに感謝いたします．また，先生方やチョーライ病院のスタッフの方々には，発熱の際にご心配をおかけしましたが，おかげさまで元気に本研修を終えることができました．この貴重な経験を忘れず今後も精一杯学びを得ようと思います．本当にありがとうございました．

2022 年度 ベトナム研修 報告書

医療科学部　放射線技術学科　4 回生　　鈴木　あか音

3 月 12 日から 23 日までの 12 日間、ベトナムでの海外研修に参加した。ホーチミン市ではチョーライ病院での病院実習、フエ市ではフエ医科薬科大学との国際交流プログラムが主な研修内容であった。

私は、主体的に考えて行動する力を養いたいと思い、本研修に参加した。医療従事者は様々な症状の患者の検査や治療を行うため、マニュアルにそのまま従うのではなく各々の判断で行動する必要がある。そのため主体性が求められる。これまで人に合わせて行動することが多く、自分の意志があやふやで人の意見に流されやすいことに悩みがあった。文化や価値観の違う国での研修を通し、主体的に行動するための積極性や、自分の行動に明確な根拠と自信を持つための思考力を身に着けたいと思い参加を決意した。実習では現地の方々とのコミュニケーションを通して新しく挑戦することに対する恐怖心や恥ずかしさを払拭することができ、以前よりも積極的に行動できるようになった。また思考力を身に着けるために自分に何が足りないのかを知ることができた。

＜チョーライ病院での病院実習＞

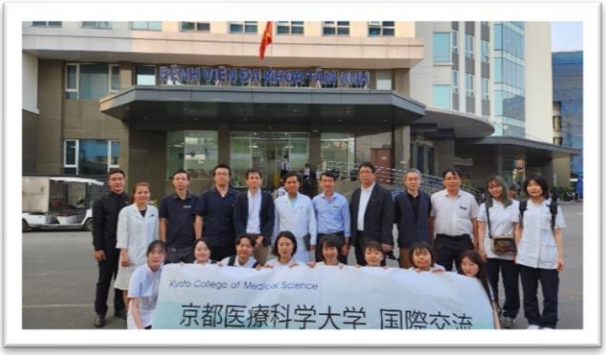
チョーライ病院での 5 日間（13 日から 17 日）の病院実習では、日本との違いに圧倒された。チョーライ病院はベトナム三大病院の一つであり、約 2000 床を持つ大病院である。病院の敷地面積は東京ドームより広く、画像診断部門、核医学部門、放射線治療部門はそれぞれ異なる診療棟を有しており、また患者数が非常に多いため病棟はマンションのようで病院全体が一つの街のように感じた。患者数が多いため放射線画像検査数も非常に多く、1 日当たり一般撮影が 1800～2500 件、CT が 550～650 件、MRI が 120 件であった。しかし、検査数に対して機器数（X 線装置は 22 台、CT 装置は 6 台、MR 装置は 1.5T が 2 台、3T が 1 台）が少なく、業務は深夜にまで及ぶと伺った。

実習では MRI、胸部 X 線撮影、マンモグラフィについて学んだ。研修中は見学だけではなく、コンソールへの患者情報や検査項目の入力、ポジショニングなど、実際の診療業務を経験した。その中で、日本とベトナム

では医療で重視されるものが大きく異なり、前者ではホスピタリティ、後者では検査の効率性が重視されていると感じた。これは検査数が非常に多いことが理由と思う。そのため胸部 X 線撮影では、検査担当技師が呼び込む前に患者が検査室に入り、指示を受ける前に脱衣し検出器受像面の前に立つ。撮影が終わるとすぐに退出し、また次の患者が検査室に入る様子があった。日本では繰り返し本人確認を実施し、注意事項についても詳細に説明するが、ベトナムでは実施していない場合があった。この様子を見て、MRI で金属の持ち込みによる重大事故が起きないか疑問に思ったが、検査日までに説明しているため、大きな事故が起きたことはないと伺った。

患者が指示を受ける前に行動することや、検査時に詳しい説明がなくても重大事故が起きていないことから、日本と比較すると患者が検査に対してとても協力的であると感じた。患者自身が検査に向き合い、能動的に行動することが、効率性の向上と安全性に寄与していると考える。

＜タンアン一般病院での病院見学＞



チョーライ病院での実習の後、17 日の午後はタンアン一般病院を見学した。タンアン一般病院は私立病院であり、病院の雰囲気や設備はチョーライ病院よりも日本の病院に近いと感じた。一般撮影・CT・MRI を見学した際には、MRI について学ぶことが多かった。特に、立位で撮影可能な MRI が最も印象に残っている。MRI は仰臥位での撮影が一般的だと思っていたため驚いた。仰臥位とは異なり、立位では荷重負荷による痛みや違和感のある状態を再現できる。このように、症状が発生している状態を画像化できるため、仰臥位よりも明確な画像診断が可能である。整形外科領域の一般撮影では立位撮影が普及しているため、近い将来、この装置が日本の多くの病院に導入されるかもしれないと思った。

タンアン一般病院の MRI 検査室は、壁や天井に様々なイラストが描かれ、騒音対策用ヘッドフォンで音楽を聴くことができ、患者がリラックスできるように工夫されていた。4 年生の病院実習では、ベトナムとの違いに注目しながら、日本の MRI 検査環境について学びたい。

＜フエ医科薬科大学での学生交流、病院実習＞

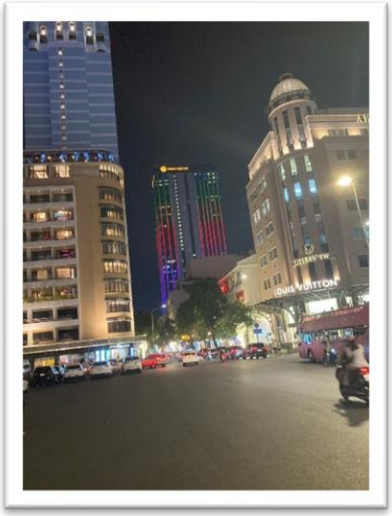
20 日から 21 日の 2 日間はフエ医科薬科大学で国際交流プログラムに参加した。主な研修内容は、附属病院の実習（MRI、胸部 X 線撮影）と、英語での画像診断の講義を受けた。MRI では撮影部位に応じた頭部用、腹部用、乳房用コイルを使用して検査する様子を見学した。また、胸部 X 線撮影では、チョーライ病院同様に、患者情報や検査内容の入力、撮影画像のコントラスト調整、ポジショニングを経験し、患者の体格に合わせた適切なポジショニングが必要であることを学んだ。

画像診断の講義は、泌尿器系の CT 画像を使用し、患者情報も参考に臨床画像を正確に読む力を養うために、画像の見方や医療用語を学んだ。講義の進行が速く、わからない英単語を調べている間に講義がどんどん進んでしまい、遅れを取ることが多かった。日常会話で理解できないことは聞き返しや翻訳ツールによって解決できたが、講義内容を理解するには、英語をリアルタイムで理解する能力が重要であると痛感した。今後はより多くの学びを得るために英語のリスニング力を伸ばしたい。

＜ベトナムの方々との交流＞

病院実習以外にも、チョーライ病院、フエ医科薬科大学の方々とパーティーで交流した。その際にはベトナム料理の食べ方を丁寧に教えていただいた。また、私が英語を上手く話せなかったり、会話を理解できなかったときには、嫌な顔一つせず理解しようとしてくださった。英語が得意ではない私でもコミュニケーションをとることができたのは、ベトナムの方々の優しさのおかげだと思う。この交流を通し、英語での会話に対する恐怖心や抵抗が薄れ、積極的にコミュニケーションを取れるようになった。

パーティーでは余興としてソーラン節を披露した。実際に披露するまでは不安と恥ずかしさで胸がいっぱいだったが、本番ではベトナムの方々の明るい雰囲気のおかげで力いっぱい踊ることができた。踊り終わった後には大きな拍手をいただき、踊りを褒めてくださる方もいた。パーティーの中でもひと際盛り上がった瞬間であった。研修期間中にソーラン節を 3 回披露したが、非常にやりがいを感じた。どのパーティーも気さくなベトナムの方々のおかげで非常に楽しかった。



＜観光＞

今回のベトナム研修では、ホーチミン、メコン川、フエを観光をした。ホーチミン市はベトナム最大の都市であり、東南アジア有数の世界都市である。１区と呼ばれる中心エリアは大きなビルが立ち並び、夜でも非常に明るかった。建物の光のない田舎町を思い描いていた私にとって、ベトナムの街並みは想像とは大きくかけ離れたものだった。ホーチミンではお土産などの買い物を楽しんだが、たいていのものは日本の半分ほどの値段で購入でき、物価の安さに驚いた。

交通量が非常に多いことで有名なベトナムだが、ホーチミン市は特にバイクの交通量が多かった。信号の無い横断歩道が多く、車やバイクは横断歩道で停車しないため、道路の横断は非常に怖かった。しかし、ベトナムの交通状況にも徐々に慣れ、最終日には堂々と道を渡ることができるようになった。長期間の滞在にて、ベトナムの環境に順応することができた。この経験から、新しい環境でも順応できる力が身についた。環境の変化に適応する力は臨床現場でも必要だと思う。本研修にて身につけた適応力を活かし、どのような環境においても自分の力を発揮できるように成長したい。

研修期間の半ばにはメコン川ツアーに参加した。小舟で川を下り、ココナッツキャンディー工場を見学した。小舟での川下りでは穏やかで落ち着いた気分になったが、船頭の方にチップを要求されたときは慣れない文化に少し怯えた。メコン川近辺には養蜂場があり、養蜂箱から取り出した蜂の巣を持たせていただいたが蜂の多さに怖気づいた。ベトナムならではの貴重な経験ができた一日であった。

都会的な印象のホーチミン市に対し、フエ市は歴史が残る街並みであった。ここでは、フエ医科薬科大学の学生がバイクで観光案内してくれた。日本の寺院とは異なり、細長い形をしたティエンムー寺や大きな敷地のフエ王宮など、たくさんの観光名所を案内してくれた。特に、夜に訪れたフォーン川の景色は強く心に残っている。

＜まとめ＞

今回の研修では英語や翻訳アプリ、ジェスチャーを使って積極的にコミュニケーションをとることができ、主体性を身に着ける大きな一歩になった。この経験を活かし、4 年生の臨床実習や将来の診療業務では積極的に行動したい。一方で、英語の知識不足は簡単には解決できない課題であると思った。研修中は伝えたいことが伝えられず、「普段からもっと英語を勉強しておけばよかった」と後悔することが何度もあった。また、病院実習中に機器や画像について質問されたときに答えられないことも多かった。自分の行動に自信を持つためには、それに見合った知識をつける必要があると強く感じた。

また、ベトナムの学生は私たち京都医療科学大学の学生よりも、多くの専門知識を習得していた。さらに、学問や自身との向き合い方に明確な考えを持っていた。このように自分なりの考え方を持つことができるのは、学んだ知識から思考し自分の考えに繋げる力が身についているからだといえる。医療現場で的確な判断をするには自分の知識を用いて思考する力が必要である。ベトナムの学生の姿を通し、深い思考力を身に着けるためにも改めて知識が重要であると感じた。今回の研修での学びを活かし、今後の勉学や実習に取り組みたい。そして、素早い判断が求められる場面に対応できるように、知識や考え方、経験を身に着け、今の自分よりも成長したい。

私は気が小さいが、多くのことを学び、成長できたのは、ベトナムの方々の優しさのおかげであると思う。様々な場面で手助けをして下さっただけでなく、話しやすい環境を作ってくださった。また、研修メンバーや引率の先生方には実習や健康、精神面においてたくさん助けていただいた。実りの多い海外研修にできたのは今回の実習に関わってくださった方々のおかげである。この感謝の気持ちを忘れず、1 年後は今よりも成長した姿で臨床現場に立てるように日々精進したい。

＜謝辞＞

本研修でお世話になったチョーライ病院、タンアン一般病院、フエ医科薬科大学のスタッフや学生の方々、引率してくださった松尾先生、水田先生、霜村先生、石田先生、サポートしてくださった村上さん、藤尾さん、このような貴重な機会を設けてくださった関係者の皆様に心から感謝いたします。

2022 年度 ベトナム研修 報告書

医療科学部　放射線技術学科　3 回生　　田中　萌衣

2023 年 3 月 12 日から 23 日までの 12 日間，ベトナムでの海外研修に参加しました．主に，ホーチミン市ではチョーライ病院とタンアン一般病院での病院実習，フエ市ではフエ医科薬科大学の学生との国際交流プログラムに参加しました．今回の研修で得られた貴重な経験について報告します．

1. 研修に参加した目的

私は，「**何事にも積極的に挑戦する姿勢を身に付けたい**」と思い，本研修に参加しました．

私が入学した 2020 年頃から新型コロナウイルス感染症が蔓延し，病院実習や大学内の各種イベントは中止になりました．さらに，感染症対策の徹底に伴う行動制限が数年間続き，新たな挑戦への積極性を失った自分に気付きました．行動力が低下した自分を変えたいと思い，ベトナム研修への参加を決断しました．研修に参加するまでは，約 2 週間の研修を乗り切れるか不安でした．しかし，ベトナム研修に向けた準備が進むにつれて，未知の世界に飛び込める嬉しさで日を追うごとに胸が高鳴りました．そして，ベトナム研修を通して成長した自分の姿を想像すると，これまでの不安は消え去り，研修開始を待ち望む自分の心の変化に気づきました．

2. 所感

・病院研修

ホーチミン市ではチョーライ病院，タンアン一般病院，フエ市ではフエ医科薬科大学付属病院で研修を受けました．

Fig. 1　チョーライ病院の CT 室

チョーライ病院はベトナムの 3 大国立病院であり，ベトナム南部全域から患者が受診します．そのため，待合室や廊下は常に患者で混雑していました．より多くの検査を行うために検査時間は非常に短く，回転率が重視されていました．チョーライ病院には 3 つの MR 装置があり，1 台あたり約 100 件/日の検査が行われていました．一方で，私立病院であるタンアン一般病院では，1 台あたり約 20 件/日の検査が行われていました．MRI 検査数の比較においても患者数の差は歴然です．日本の MRI 検査では技師が患者の寝台移動などの補助をしますが，チョーライ病院では検査の回転率を上げるために，患者や患者家族の補助によって寝台に移動していました．また，一般撮影では MRI よりもはるかに患者数が多いため，患者に対してポジショニングを指示している時間はなく，技師が直接患者を動かすことでポジショニングを行なっていました．患者は技師の指示を聞き，迅速に行動していたことが印象に残っています．一般撮影の検査時間

は，患者 1 人当たり約 40 秒と非常に短時間で検査をされていました．より多くの患者を検査するために効率を求めた結果，患者が積極的に協力する検査体制になったと考えました．

日本は病院数が多く，国民皆保険制度によって安価に高度な医療が受けられます．しかし，ベトナムは病院数が少なく，国民皆保険制度がないために医療格差が生じています．本研修を通し，日本が医療制度に恵まれた国であることを実感しました．

Fig. 2　フエ医科薬科大学付属病院

・海外交流

ベトナムの方々は，ポジティブでチャレンジ精神に富んでいました．参加目的にも記載した通り，私は，行動力が低下して新しい挑戦に消極的になっていました．しかし，活気に満ち溢れた方々と過ごし，多くの刺激を受けたことで，積極的に挑戦できるようになりました．また，ベトナムの方と過ごすうちに，「完璧である必要はないから積極的に交流しよう」と考え方が変化しました．実際に，研修初日は英語での会話に苦戦していましたが，少しずつ挑戦を重ね，徐々に英語で会話できるようになりました．

さらに，ベトナムの学生の学ぶ姿勢にも刺激を受けました．フエ医科薬科大学の学生は卒業直後から即戦力になれるように，実践的な内容を積極的に学んでいました．一緒に研修を受けたベトナムの学生に，「日本では学生による静脈注射は禁止されている」と伝えると，「就職してからの技術習得は患者のためにならない」と言われました．これまでは，大学で静脈穿刺の講義を受けられないことに対し，何も感じていませんでしたが，先方の学生からの一言で，医療を学ぶ学生としての姿勢を見直す必要性を痛感しました．国家試験合格を目指して日々学習していますが，学習内容をどのように患者のために活かすかは全く想像していませんでした．就職後に即戦力になるためには，「患者のために学びを活かす」という意識で学ぶことが大切だと思いました．新たな知識や経験を得るためには，失敗を恐れないこと，目的を持って挑戦すること，そして，常にポジティブな気持ちで行動することが大切であると学びました．

Fig. 3　フエ医科薬科大学の学生との交流

Fig. 4　ホーチミンでの Welcome Party

・観光

フエ医科薬科大学の学生に，チャンティエン橋やティエンムー寺など，たくさんの観光地に連れて行ってもらいました．彼らはベトナムで生まれ育ったことに誇りを持ち，私たちにベトナムの文化や食事を紹介してくれました．一方で，私は地元の観光地をほとんど案内できません．日本で生まれ育ったにも関わらず，日本の魅力を説明できないことに恥ずかしさを覚えました．日々を漫然と過ごすだけでは，身近な物事の魅力に気付かないと感じました．今後は様々な物事の魅力を発見できるように，どんなものにも興味を持てるようになりたいと思いました．

Fig. 6 チャンティエン橋

3. まとめ

ベトナムの方々との交流を通し，「**何事にも積極的に挑戦する姿勢を身に付ける**」という参加目的は達成できたと思います．何事にも積極的に挑戦し，行動力を高めるためには，ポジティブな思考を持つこと，失敗を恐れないこと，そして，未知との出会いを成長の機会と捉えることが必要であると痛感しました．今後は，「積極的に行動する力は自身の強みである」と胸を張れるように，継続的に自らの意識改革に努めたいです．

4. 謝辞

海外研修という貴重な機会をいただきありがとうございました．ベトナムで得た知識や経験を今後の人生に活かし，日々成長したいと思います．最後に，研修を受け入れてくださったチョーライ病院，タンアン一般病院，フエ医科薬科大学の皆様，様々なサポートをしてくださった事務職員の方々，引率をしてくださった松尾悟 先生，水田正芳 先生，霜村康平 先生，石田翔太 先生に深く感謝申し上げます．

2022 年度 ベトナム研修 報告書

医療科学部　放射線技術学科　３回生　　田村　紗那

3 月 12 日から 3 月 23 日までの 12 日間、ベトナムにて海外研修が実施されました。研修に参加した目的は、より広い視野でベトナムの医療を捉え、これまでに習得した放射線技術学の知識を再確認することと、日本との違いを知り新しい知識や技術を習得することです。さらに、ベトナムの学生と積極的に交流し、異文化を肌で感じることも楽しみにしていました。ベトナム研修で得た学びについて報告します。

病院実習(ホーチミン)

チョーライ病院

13 日から 17 日の 5 日間、ホーチミン市にあるチョーライ病院にて臨床実習を行い、主に MRI と一般撮影について研修しました。チョーライ病院は患者数が非常に多く、待合室は患者で溢れていました。病院スタッフは、「検査数が多い中で患者一人ひとりを丁寧に撮影することは難しい。ここでは、検査時間を短縮することが最優先である」と伺いました。被曝のリスクや健康面への不安を抱えながらも、患者の立場に立ってスピディーに検査をされる姿に敬意を払わずにはいられませんでした。MRI では、病院スタッフの患者に対する移動の補助や介助の仕方など日本との違いを感じました。患者の家族の検査室までの付き添い、検査室内に撮影を終了した患者がいる状況での次の患者の入室、別患者による検査台から降りるときの患者の介助など、医療スタッフ不足による現状を目の当たりにしました。一般撮影では 1 日 2 千件以上撮影しているとの事でした。一度の撮影時間が短く、検査室のドアが閉まり切っていない状態でも照射している状況もありました。被ばく線量が多少増えても、患者の回転率を上げることの方が重要だと知りました。また、ベトナムでは診療放射線技師の監督下であれば学生も静脈注射ができることに衝撃を受けました。日本では、法改正前までは資格の範囲外として許されない医療行為であることを現地の学生に伝えると、逆に驚かれ「学生が手伝えば成長するし、業務の手助けにもなる」と話していた言葉が印象的でした。「学生の成長につながる」という言葉から、6 月に控えている日本の病院実習について考える良い機会となりました。私もベトナムの学生と同様に、日本も臨床実習生が静脈注射を実施できれば業務効率が向上すると思いました。さらに、入職後は即戦力として働ける診療放射線技師を養成する教育体制にも魅力を感じました。一般撮影では、ポジショニングの際、患者にベトナム語はもちろんのこと英語も通じない状況にもどかしさを感じました。現地のスタッフの方に手助けいただきましたが、自力でやりたく、ジェスチャーを交えどうにかやり切ることができました。効率良く検査できなかった悔しさと共に、「伝える」ことの大切さ（言語力）や「患者への安心感」（リラックス）の重要性を学びました。撮影技術というスキル面だけではなく、患者

とのコミュニケーションの大切さを実感し、「相手が理解しやすい様に伝えるにはどうするべきか」、今後の課題を見つける事ができました。

タンアン一般病院

17 日の午後はホーチミン市にあるタンアン一般病院を見学しました。タンアン一般病院は、近代的な設備だけでなく、ホテルを思わせるような高級感を感じさせる「5 つ星ホテル病院」が特徴でした。チョーライ病院と同様、1 日の検査数が非常に多く、ベトナムでは限られた時間でより多くの検査を実施できることが大切であると感じました。検査数が多い中でも丁寧な患者への声掛けや状態確認などホスピタリティを重視していると思いました。また、立位撮影可能な OPEN MRI、および MRI と CT が操作室を共用する珍しい構造が印象に残っています。

フエ医科薬科大学(附属病院)

21、22 日の 2 日間はフエ医科薬科大学での国際交流プログラムに参加し、先方の学生が病院を案内してくれました。ベトナムでは診療放射線技師の国家試験が存在しないことを直接聞き、非常に驚きました。病院見学中に、フエ医科薬科大学の先生に胸部一般撮影時の SID について質問されましたが、質問内容は理解できたが、英語で解答することはできませんでした。また、学生が私達に MRI 画像の解剖やマンモグラフィ装置の仕組みについて教えてくれました。英語力の低さと学習したことの未定着さを思い知らされました。先方の学生の積極的に学ぼうとする姿勢や知識量の多さに感銘を受けた一方で、同じ診療放射線技師を目指す身として自身の勉強不足を痛感し、4 年生の臨床実習は十分に勉強して臨みたいと思いました。さらに、フエ医科薬科大学の学生の社交性も非常に魅力的でした。何事にも積極的に、率先して挑戦することが必要であると学びました。

お忙しい中、私達を受け入れ、病院実習にて貴重な経験をさせていただいたチョーライ病院、タンアン一般病院、フエ医科薬科大学病院の方々に感謝申し上げます。

交流

Welcome party や Thank you party では、チョーライ病院のスタッフやフエ医科薬科大学の学生と積極的にコミュニケーションをとり多くの人と交流を深めることができました。チョーライ病院のスタッフの方々はとても温かく、私達が馴染めているか常に気にかけてくださいました。また、現地の生活や文化についても詳しく教えてくださいました。

フエ医科薬科大学の学生はティエンムー寺やフエ王宮、チャンティエン橋などの名所への観光やチェーと言われるベトナムのローカルスイーツや餅を使ったローカルフードを食べるために市場に案内してくれました。現地の生活や文化に触れることは非常に新鮮で、異文化を学ぶことで自分自身を見つめ直すこと、新しい考えを知ることに繋がると感じました。

私達は研修期間に、感謝の気持ちを込めてソーラン節をパーティーにて披露したところ、大変喜んでくださいました。

現地でのコミュニケーションは英語であったため、必要に応じて翻訳ツールを利用し、時には body language も交えました。英語は苦手ですが、話そうとチャレンジすれば、相手も理解に努めてくれることを知りました。英語でコミュニケーションをとるためには、勇気と度胸が必要であること、伝えようとする姿勢が重要である事を学びました。

この研修で得た、言葉の壁を越えて共有できる感情や時間、現地の学生の思いやり、そして、様々な人との出会いに感謝の気持ちで一杯です。

観光

・メコンリバーツアー

ボートに乗ってメコン川をクルージングしました。メコン川は現地の方の食や住を支える大切な川であると学びました。バナナチップス、はちみつとライムティーが軽食として提供され、昼食ではエレファントフィッシュを食べました。軽食時に同席した韓国人とも韓国語と英語を混ぜて会話でき、楽しい時間を過ごすことができました。

まとめ

２年生の時、新型コロナウイルス感染症の影響で臨床実習を病院では実施できず、今回のベトナム研修で初めての病院実習をしました。今回の研修を通し、「自ら行動しないと何も変化しない」ことを身をもって体験し、主体的な行動ができる人になりたいと考えるようになりました。今後は英語で外国の方とコミュニケーションを取り、文化や生活の違いを体験したく、自身の語学力を伸ばしたいです。今回の研修で、ベトナムの人々との交流や文化に触れた事で視野を広げる事ができました。私達は普段から無意識に、知らず知らず外部からもたらされた情報にて判断をしていると思います。私自身も研修前、行ったこともないベトナムに対して「治安が悪そう」とマイナスなイメージを持っていました。しかし、ベトナムの方々は親切で温かく、自然も豊かでとても活気あふれた国でした。自分の先入観を払拭し異なった価値観や考え方を受け入れる事で、思い込みや偏見を無くし、相手を受け入れられる人間になりたいと思いました。

今回の研修メンバーには初の海外渡航であった学生も多く、加えて初めて医療現場での実習という緊張感も重なり、環境の変化に対するストレスで体調を崩す学生が多くいました。その中で、皆で協力して助け合う事、周囲への気配りや声をかけることの大切さを学びました。

私の出身地である沖縄には「普通の上等」という言葉があります。普通が最高という意味です。今回の研修参加を通し、何事もなく過ごせている日常の当たり前に感謝する事が大切だと感じました。

今回、ベトナム研修に参加を支援してくれた両親に深く感謝しています。さらに、引率して下さった松尾先生、水田先生、霜村先生、石田先生、本当にありがとうございました。今回参加した仲間と多くのことを一緒に体験する事ができて本当に良かったです。この経験を私自身の糧にし、将来に繋げていきたいです。

2022 年度 ベトナム研修 報告書

医療科学部　放射線技術学科　3 回生　　中村　晃規

【はじめに】

3 月 12 日から 23 日の 12 日間に参加したベトナム研修での経験を報告する．研修内容は，チョーライ病院で 4 日間の実習，タンアン総合病院で半日の見学，フエ医科薬科大学で 2 日間の交流プログラムであった．

【病院実習】

チョーライ病院はベトナムの 3 大総合病院の一つであり，ベトナム南部において最大の医療機関である．そのため，毎日多くの患者が来院し，1 日の X 線検査数は 2000 件にも上る．X 線検査にて，照射野を患者ごとに調整することはなく，検査室内に検査を終えた患者が残っている場合や，ドアを閉めずに撮影することもあった．一人でも多くの患者を検査するため，検査の回転率を上げることを優先にしていると考えた．

タンアン総合病院は，2021 年に開設された病院であり，チョーライ病院と比べて院内は清潔に保たれ，最先端の設備が整えられていた．特に，日本には数台しかない立位撮影可能な常電導磁石型の MRI 装置が印象的であった．通常の MRI 装置で荷重撮影を実施する際は，ロープなどで疑似的な荷重をかける．一方で，この装置は臥位から立位に寝台を回転できるため，日常生活における関節の状態を正確に把握できる利点がある．

病院見学後，院内の会議室で日本とベトナムの医療に関する意見交換が行われた．その場で，学生も質問する機会をいただいたが，内容が思いつかず，その機会を逃した．興味や疑問を持ち，積極的な対話を心掛けることは自分の成長を図るほか，相手との信頼構築に繋がりやすい．医療従事者や患者とのコミュニケーションにおいても重要であるため，いろいろな視点から質問できるようになりたいと思えた．

フエ大学病院では，各モダリティを案内していただき，装置の使用方法や撮影法を学んだ．特に MRI に関する問題が分からず，英語で説明されるとさらに理解が難しかった．T_1，T_2 強調像は見分けられたが用途の理解が乏しく，磁化率強調像や拡散強調像などの理解も浅いことに気づかされた．今後は，既習知識を臨床で活用できる実践的な知識に昇華させることが課題であることがわかった．

フエ医科薬科大学では，「フエ医科薬科大学病院の設備」と「症例と撮影体位」に関する講義を受けた．フエ医科薬科大学の先生は分かりやすい英語で丁寧に講義してくださり，英語が苦手な私でも講義内容を理解できた．「症例と撮影体位」に関する講義では，フエ医科薬科大学病院の症例が用いられた．症例に適した撮影体位の理解を深めることができ，臨床を意識した学習が大切であると体感した．

【国際交流】

ベトナムの方は社交的で優しい方が多く，英語が拙い私でも楽しく交流できた．チョーライ病院の方との歓迎会で，始めは緊張したが，同じ食を共にすることで，病院実習のときよりも気さくに話すことができた．ベトナムの方々の優しさに気づき，その後の病院実習には，より積極的に取り組むことができた．また，お世話になったお礼として thank you party を開催し，ソーラン節を披露した．終盤には，ドラえもんの主題歌やベトナムで人気の「ベトナム　オイ」などを一緒に歌い，楽しく交流を深めることができた．

その他にチョーライ病院の実習時に出会ったホーチミン医科薬科大学の学生たちとも交流できた．ホーチミンの食事を一緒に食べ，カフェで翻訳アプリを片手に語らい，大切な友人ができた．彼らとは今でも連絡を交わしており，再びベトナムに渡航したい気持ちは高まるばかりである．

フエでは歓迎会に招待いただき，フエ医科薬科大学の学生たちと交流した．フエ医科薬科大学の学生たちは，日本をモチーフにしたダンス「TOKYO BON」を披露してくれた．このこともあり，より親近感が得られ，連絡先を交換するほど交流を深めることができた．フエ医科薬科大学やフエ医科薬科大学大学病院の見学後は，先方の学生たちが運転するスクーターの後ろに乗り，フエの大衆料理屋，観光地，スーパーマーケットなどに連れて行ってくれたため，たくさんの思い出ができた．

多くの交流にてベトナムの友人ができ，ベトナムの良いところをたくさん知ることができた．国内では，海外の方と交流する機会が少ないため，貴重な経験になった．また，英語に自信がなくてもコミュニケーションを試みることの大切さを知り，研修前に先生方からいただいていた「英語は度胸だ」とのお言葉を，身を以て実感した．

【観光】

東南アジアで最長のメコン川を船や筏に乗って観光した．途中には陸に上がり，果物や現地で作ったココナッツキャンディを食べた．キャンディはお土産に購入するほどとても甘くて美味しかった．ただ，ツアーの昼食に用意されたベトナム料理にお腹を下した．今となっては良い思い出だ．メコン川ツアーではベトナムの壮大な自然と現地の暮らしを知ることができた．

【ベトナムと京都医療科学大学】

ベトナムの文化や国民性は日本とは異なることが多く，新鮮な気持ちになった．町並みは西洋と東洋と現代の建築が混ざり合っており，ベトナムの歴史が垣間見えた．また，道路は二輪車や自動車で埋め尽くされて信号も少なく，横断が難しかった．しかし，ベトナムの方々に，交通手段の手配や道路を横断する際の手助けなど，研修時以外でも，多大なサポートをいただいた．私は心地よいと感じたと共に，なぜこんなにも親切にしていただけるのかと疑問を抱いた．そのため，先生方に伺い，チョーライ病院との交流は 7 年目であるが，京都医療科学大学とベトナムの関係はベトナム戦争のあった 1970 年代から始まることを知った．また，松尾先生たちが交流を始めたのは約 20 年も前からであり，当初私が想像していたよりも親密な関係であった．故に，初対面であるにも関わらず，過去から積み重ねてきた絆が，手厚いおもてなしという形にて，我々に向けていただいていることがわかった．感謝の気持ちを返すことができず，先達が培ってきた想いを我々が受け取ることに，申し訳なくとも感じたが，感謝の気持ちを忘れず，今後に活かすための経験としたい．また，フエ医科薬科大学との交流が今年度から始まり，本学とベトナムの関係がさらに深まると感じた．ベトナムの方たちに親切に接していただいたお礼として，彼らが日本に来られた際は，最大限のおもてなしにて想いをつなげたい．

【学び】

病院実習では，日本とベトナムの診療放射線技師の業務の違いだけでなく，実習へ臨む姿勢についても学んだ．ベトナムで培った「積極的に行動すること」はどこであっても大切である．4 回生では病院実習があるため，ベトナムで学んだ積極性を活かしたい．英語を話すことは海外の方とのコミュニケーションにて大切であるが，それよりも，伝えようとする姿勢，表現力がより大切であると体感した．国際化が進む中，様々な母国語の方との交流に向けて，「言語が通じない」という理由で交流の機会を逃したくはない．そのため，語学に加え非言語コミュニケーションについて学びたい．

【謝辞】

このような機会を設けてくださった先生方や親切に接していただいたベトナムの技師の方々と学生たち，サポートしていただいた方に深く感謝申し上げると共に，この素晴らしい交流が長く続くことを願う．

2022 年度 ベトナム研修 報告書

医療科学部　放射線技術学科　３回生　　藤村　美穂子

はじめに

2023/3/11～3/23 に行われたベトナム研修の内容と、期間中に得た学びを報告します。
本研修に参加した動機は、新型コロナウイルス感染症の行動制限によって関わる人が限られ、診療放射線技師として働く上での視野を広げる機会を失っていることに危機感を感じたからです。視野を広げ、常に多くの選択肢を持ちたいと考えていた時に、本研修が 3 年ぶりに開催されることを知りました。そこで「ベトナムの人々のことを知り、新たな考え方や価値観に触れること」を目標に、本研修への参加を申し込みました。

3/13～3/17　チョーライ病院研修

チョーライ病院はベトナム 3 大総合病院の 1 つでベトナム南部地域最大の医療機関です。2015 年の交流協定締結後は毎年、本学の学生を病院実習生として受け入れてくださっていましたが、新型コロナウイルスの世界的な流行で交流が中断し、今年は 3 年ぶりの訪問でした。私たちの学年は新型コロナウイルスの影響で 2 回生の病院実習が学内実習に変更されたため，初めての病院実習を海外で経験することになりました。4 日間の研修では一般撮影や MRI、マンモグラフィについて、検診から治療の経過観察の患者さんまで多くの症例を学びました。

一般撮影

一般撮影では、受付からポジショニング、撮影、フィルムの印刷など一連の撮影業務を経験しました。1 部屋当たり 1 時間で約 30 人もの患者さんの撮影をする非常に多忙な中、私たちの実習を受け入れてくださいました。膨大な検査数を効率良く正確に遂行するために常に最大照射野で撮影し，1 回の曝射で撮影範囲が必ず含まれるように工夫していました。被曝低減に努めながらも、少しでも多くの患者さん撮影できるように効率を重視した検査が実施されていました。ベトナムは人口に対する医療機関の割合が少ないために病院あたりの患者数が多く、検査方法にまで影響を及ぼしていることを知りました。また、技師の方々は全ての患者さんが適切な医療を受けられるように、可能な限り患者さんと向き合い、最適な医療を提供していると感じました。技師として働き始めた際には，置かれた環境で常に最善を尽くしたいです。

MRI

2日間に渡りMRIの実習を行いました。MR装置1台あたり1日に約40件を撮像しており、検査が途切れることはありませんでした。その中で、MRIの撮像やフィルム印刷を経験させていただきました。患者さんと向き合いつつも、常に私たちを気に掛けてくだりました。指導していただいた技師さんが「何か新しいことを習得して帰ってほしい」と言ってくださり、より多くのことを学ぼうという実習のモチベーションとなりました。チョーライ病院の技師の方は常に周囲の状況を把握し、能動的に行動することを当たり前にされておられました。このような力を身に付けるために、日常生活においても常に周囲を観察する習慣をつけようと思いました。また、操作室ではベトナムの学生や他院の技師も研修を受けられており、チョーライ病院の技師の方に代わり、各シーケンスの撮像理由、画像の見え方の違いなどを細かく教えて頂きました。実験の際にMRIの機器を一度操作しただけで知識が浅かったため、非常に勉強になりました。

ベトナムは技師不足により、学生も医療従事者として活躍することが求められていました。そのため、ベトナムの学生は、１回生で3カ月、2回生後期から4回生の卒業試験までに合計1年8ヶ月間の病院実習を受けます。入職時には即戦力であることが求められ、実習にて一人で検査できるように練習するため、私たちよりもはるかに多くの知識と技術を持っていました。医療の状況の違いが教育にも影響を及ぼすことを実感しました。ベトナムの学生は分からないことや失敗を大切な学びの機会と捉えていました。彼らは失敗して落ち込むのではなく、原因と対策を冷静に考えてすぐに次の行動に移っていました。失敗を活かすために、まずは行動する意識を持ち医療現場に立ちたいです。

チョーライ病院の技師、学生との交流

チョーライ病院の技師の方々と2回のパーティーを通して交流を深めることができました。チョーライ病院のスタッフの方はとてもフレンドリーでたくさんの話をしてくださいました。また、チョーライ病院のスタッフの方々は互いに積極的にコミュニケーションを取り、良好な関係を築いて仕事をしている印象を受けました。病院では他職種と関わりながらチーム医療を行う必要があり、積極的にコミュニケーションを取ることの重要性を感じました。技師として働き始めた際には他職種ともお互いに尊敬の念を持ってコミュニケーションを図りたいです。

実習初日の夜は、実習中に仲良くなったベトナムの学生と食事に行きました。互いの学生生活や流行、家族のことなど、日本の友達と変わらない話で盛り上がり、交流の機会を得られたことがとてもうれしかったです。病院実習では主体的に検査を進める姿がすごく大人に感じましたが、ベトナムの学生は学業とプライベートの切り替えがとても上手く、私も見習いたいと感じました。仕事とプライベートをしっかりと分け、常に患者さんに集中できる技師になりたいと思いました。

3/19～3/22　フエ医科薬科大学との交流

フエ医科薬科大学の学生と交流しました。約 3 日間の交流でしたが、年齢が近いこともあり、すぐに仲良くなりました。ベトナムの家庭料理を食べに行き、バイクで観光地を巡り充実した時間を過ごせました。また、短い時間でしたが、大学病院でも実習をさせていただきました。フエ医科薬科大学の学生も実習を通して臨床に携わることで多くの知識を持っていました。

まとめ

本報告書には書ききれないほどに充実し、多くの出会いと学びを得られ、忘れられない経験となりました。国、文化、言語が異なる中、心が通じ合えたことは、本研修にて得た学びの中で特に大きいと感じます。ベトナムで出会ったすべての方々はどのような場面でも非常に親切でした。その理由を尋ねると、「あなたのために, 私がしたいことをしているだけ」と回答してくださいました。ベトナムの方々との関わりの中で、相手に「親切に思われたい」から、「親切にしなければならない」ではなく、「相手のためにできること」、「したいことを行動に移す」、その結果が優しさとして表れているとわかりました。私は周囲の目を気にして自分の感情を素直に行動に移していませんでした。「周りの人に親切に思われたい」という理由で行動するのは優しさとはかけ離れた行為であると気付かされました。本当に相手を想った行動は相手に伝わることを体感しました。患者接遇のために親切にするのではなく、患者さんのために自分がしたいことを素直に行動に移す技師になりたいと思いました。

謝辞

本研修において、引率だけでなく、準備から多くのサポートをいただき、研修を支えてくださった、松尾教授、水田教授、霜村講師、石田助教に感謝を申し上げます。先生方のおかげで約三年半停止していた本研修が再開したことを本当にうれしく思います。さらに、事務及び先生方にご支援いただき無事に研修を終えることができましたことに感謝を申し上げます。今後は途切れることなくチョーライ病院、フエ医科薬科大学と京都医療科学大学との交流が末永く続くことを願っています。

実習を受け入れてくださったチョーライ病院、タンアン一般病院、フエ医科薬科大学病院の皆様、国際交流にご協力いただいたフエ医科薬科大学の先生方、今回交流した学生、本研修にて関わる全てのベトナムの方に感謝を申し上げます。病院の皆様は、臨床の知識や技術の少ない私たちに多くのことを経験させてくださいました。日本では経験できない貴重な機会をいただくことができ、本当に感謝しています。また、フエ医科薬科大学の学生は我々を歓迎し、友達になってくれました。将来、病院で同じ責任を持ち働く仲間と国境を越えて繋がれたことをうれしく思います。

本研修にて得た素晴らしい経験や学んだことを忘れずに、日々の生活で活かせるように精進いたします。
繰り返しとなりますが、本研修に関わってくださった全ての方々、本研修で出会った全ての方々に心より感謝申し上げます。

2022 年度 ベトナム研修 報告書

医療科学部　放射線技術学科　3 回生　　村上　未紗

3/12 から 3/23 までの 12 日間、ベトナム研修に参加した。チョーライ病院での実習やフエ医科薬科大学での学生交流を通し、ベトナムの環境、文化、習慣、そして放射線に対する考え方の違いを体験したいと思い参加した。

ベトナムに着き、まずはバイクの多さに驚いた。空港からタクシーでホテルに移動している際、バイクが今にも衝突しそうなくらい近くを走行しており、冷や冷やした。日本ではありえない 5 人乗りで走行しているバイクや、ゴミを道端や床に捨てる光景にも驚いた。ベトナムの方の 1 日は朝早くから始まり、昼休憩は 2 時間あることも日本とは大きく異なっていた。

【病院実習】

＜チョーライ病院＞

3/13 から 3/16 の 4 日間、チョーライ病院で一般撮影、マンモグラフィ、MRI の実習を受けた。チョーライ病院はベトナム 3 大病院の 1 つであり、入院・外来ともに患者数が非常に多い。そのため、各装置の検査件数が多く、検査時間は非常に短かった。

初日に実習を受けた一般撮影では、撮影を終えた患者さんが撮影室から退出する前に、次の患者さんが入室していた。また、胸部撮影では技師がポジショニングすることなく、患者さんが自ら撮影体位になり、技師は操作室から指示するのみであった。患者さんの協力を得て効率的に撮影し、検査時間を短縮していた。さらに、撮影中にも関わらず撮影室内で着替える患者さん、常に最大照射野による撮影やドアを開けたままの撮影を目にすることが多く、当初は、ベトナムの方々は被曝に対する意識が低いと感じた。しかし、日本の約 5 倍もの検査数を効率的に進めるための方法であることを知り、検査時間を短縮するためには、被曝管理よりも時間効率を優先することはやむを得ないと思った。また、撮影室のドアが開いたまま撮影していても患者さんは全く気にして

おらず、他の患者さんの撮影中に焦る様子もなく検査室内で着替えていたことから、放射線に対して強い不安を持っている日本人とは対照的に、ベトナムの方々はそうではないように見られた。

日本とは異なり、ベトナムの診療放射線技師は国家資格では無いため、実習生でも病院で放射線技師と同じ医療行為ができる。そのため、チョーライ病院で実習を受けていたホーチミン医科薬科大学の学生と放射線技師の方を区別できなかった。彼らは、実習にて実務経験を積み、卒後、臨床現場にて即戦力となる。知識が無くては臨床で応用もできないため、さらに勉強に力を入れたいと感じた。

＜タンアン一般病院＞

3/17 の午後から、タンアン一般病院を見学した。チョーライ病院のような歴史のある施設ばかりだと思っていたが、タンアン一般病院は 2021 年に開設された新設病院であり、日本の病院と同じようにキレイで驚いた。清潔感があり、検査室内や待合スペースは広く、最新装置が導入されていた。MRI 室と CT 室の壁には様々なイラストが描いてあり、検査の不安や緊張を和らげられそうであった。

MRI 室には、姿勢変化による荷重撮影が可能な OPEN MRI 装置が設置されていた。一般的なトンネル型とは違い、患者さんを挟み込む開放的な形状であり、圧迫感がなく検査を受けやすそうであった。

【フエ医科薬科大学】【観光】

3/19 から 3/21 の 3 日間、フエ医科薬科大学の学生との交流を主として、病院見学や講義、観光をした。

病院見学のときに、チョーライ病院の放射線技師の方と繋がりのある放射線技師の方と出会ったことで、話すきっかけができ少し緊張がほぐれた。歓迎交流会では、フエ医科薬科大学の学生達はダンスや東京盆踊り、バラードソングを、我々はソーラン節を披露することで、緊張が無くなり会話しやすくなった。昼食時や病院見学後にフエ医科薬科大学の学生達が、バイクに乗せて様々な場所へ連れて行ってくれた。今まで一度もバイクの後ろに乗ったことが無かったため緊張したが、慣れた運転に安心した。風を感じながら走ることができとても楽しかった。何事にもチャレンジしてみることが大事だと思った。

3 日間という短い期間であったが、研修時間外も含めて十分に交流できたため学生達と親密になり、たくさん刺激をもらった。日本人のように空気を読むということはあまりなく、思ったことははっきり伝えることから、私も相手の心に想いがきちんと届くように気持ちはしっかり伝えたいと思った。

＜メコン川ツアー＞

メコン川は、チベット高原の源流から中国雲南省を通り、東南アジア 5 か国を流れる河川である。ツアーガイドの方による説明は全て英語だったため、所々しか理解できなかったが、水は濁っているが栄養豊富だということは聴きとれた。昼食時に、メコン川で育った魚を食べてみると美味しかった。

　ツアーでは、はちみつ農園、ココナッツキャンディー工場を見学し、手漕ぎボートにも乗った。手漕ぎボートで川を渡っていると、現地の方々の様子も見ることが出来た。また、ツアー中には日本で経験することが無いチップを支払った。相手の行為に対するお礼として、渡したいと思える気持ちの分だけ支払うという日本では無い習慣で良い経験になった。

【まとめ】

研修、観光、交流と非常に貴重で充実した 12 日間を過ごすことができた。12 日間過ごした中で、ベトナムの方々はフレンドリーで優しいと最も感じた。ベトナムの方から話しかけて下さって嬉しかった。

　今回の研修で、英語ができなくてもジェスチャーや表情で伝えようとすることでコミュニケーションが取れることが分かり、何事にも勇気を出してチャレンジすることの大切さを学んだ。ベトナムと日本で習慣や文化、環境、放射線に対する考え方の違いを体験し、日本では当たり前のことも、国が変わると当たり前ではないことを実感した。ベトナム研修に参加したメンバーの中でも、自ら動き、積極的にコミュニケーションを取っていた人は、初対面の技師の方々やベトナムの学生達と数分後には仲良くなっていた。これからは私も積極的に行動し、誰とでも親しくなれる人になりたいと思った。ベトナム研修に参加して本当に良かったと思っている。

【謝辞】

最後になりましたが､私たちの研修をサポートいただいたチョーライ病院の方々､タンアン一般病院の方々、フエ医科薬科大学の方々、宿泊施設のスタッフの方々に感謝申し上げます。また、終始見守って下さった松尾先生、水田先生、霜村先生、石田先生、今回の研修のために準備してくださった本学の関係者の皆様に深く感謝いたします。

2022 年度 ベトナム研修 報告書

医療科学部　放射線技術学科　３回生　　山本　未来

1. 概要

2023 年 3 月 12 日から 23 日までの 12 日間，ベトナム研修に参加しました．本研修では，ベトナム最大の都市であるホーチミン市にて病院実習を受け，京都のように歴史的建造物が多く残る都市であるフエ市にて学生と交流をしました．

▲研修メンバー

・目的

コロナ禍に始まった大学生活は早くも 3 年が経ちました．就職活動が目前に迫り，何も準備をしていないことに焦りを感じながらも，いつも通り過ぎていく日々に不安が増していました．この現実を受け入れることが怖く，いつも自分と向き合うことから逃げてきた私にとって,「自分がどうしたい？」と選択を迫られる進路活動は苦しいことでした.「自身を成長させたい」という同じ想いで挑戦する仲間と共に，日本とは環境が異なる場所で色々な価値観に触れ，将来の選択肢を広げるために本研修に参加しました．

▲チョーライ病院

2. 主な活動

・病院実習

3 月 13 日から 17 日にホーチミン市に所在するチョーライ病院で実習しました．チョーライ病院は保健省直轄のベトナム 3 大総合病院の 1 つで，ベトナム南部地域最大の医療機関です．チョーライ病院の病床数は約 1800 床で，京都大学医学部付属病院は約 1100 床であることから，チョーライ病院はとても大きな病院であることが分かります．私は 5 日間で X 線検査，マンモグラフィ検査，MRI 検査を実習しました．X 線検査は 1 日 400 人撮影するため，担当の技師の方は常に迅速な対応をされていましたが，待合室は常に患者さんで溢れていました．患者さんの入替時間を短縮するためと考えますが，撮影室内で患者さんが順番を待たれており，とても驚きました．そのような多忙な状況にも関わらず、胸部撮影のポジショニング方法を教えてくださいました。マンモグラフィ検査では CC 撮影と MLO 撮影

▲チョーライ病院での集合写真

のポジショニングをさせていただきました．病院実習も初めての状況で患者さんとも初めて接するため，とても緊張しました．乳房の圧迫の強さや装置の操作方法など分からないことが多く戸惑いましたが，担当の技師の方が優しく丁寧に教えてくださり，適切なポジショニングができました。MRI 検査では，ホーチミン医科薬科大学の診療放射線技師を志す学生と一緒に実習しました．ベトナムの学生は学びに貪欲であり，実践的な知識に富んでいました．彼らの勉学に対する姿勢に感服すると同時に，同年代の診療放射線技師を志す学生との知識量の差を感じ，悔しい気持ちになりました．初めての病院実習を経験して，学びを臨床において実践する難しさや知識・経験不足を実感し，最後の 1 年の授業や病院実習を大事にしたいと思いました．

▲MRI 検査の実習

・国際交流

3 月 19 日から 22 日にフエ医科薬科大学の学生と交流しました．私たちは，フエの学生が運転するバイクに乗り観光地を案内してもらい，沢山会話しました．本研修に参加する前は英語力に自信がなく，ベトナムの人々と会話できるか不安でしたが，簡単な英単語と身振りで気持ちを理解してくれました．初めは，伝えたいことが中々伝わらず困惑しましたが，間違いを繰り返しながらも，何度も伝えようとすることで英会話力が向上しました．そして，自分の感情や意見が伝わらなくても消極的にならず，積極的に会話して伝わる方法を見つけたいと思えるようになりました．

▲フエ医科薬科大学の学生との集合写真

私たちは，フエ市での国際交流の期間に 2 回パーティーをして，お互いにダンスを披露しました．私たちの「ソーラン節」を観て，ベトナムの方々が喜んでくださり，とても嬉しかったです．また，ベトナムにはお酒の席で何度も乾杯をする慣習があるため，私たちも何度も乾杯をしました．先方の学生と沢山会話し，人気のあるカフェや観光地を教えていただきました．大人数で会話しながら食事をするのは約 4 年ぶりで，徐々にコロナ禍前の生活に戻れていることに嬉しさを感じました．最も感銘を受けたのは，ベトナムの人々のおもてなしの心です．飲み物が無くなるとすぐに注いでくださり，視野が広く心に余裕がある方が多いと感じました．私も視野を広げ，常に相手の立場に立って考え，周りの方々に気遣いができるようになりたいです．これほど温かく迎え入れてくださったのは，これまで先生方や先輩方が長年に渡り良好な関係を築いてくださったお陰でもあります．国を超えて，お互いを尊重し合う気持ちが素敵な関係を築くのだと思いました．お互いに理解し，尊重し合える対話力を身につけたいと思いました．

▲ソーラン節

▲パーティーの様子

3. 所感

バイクで溢れた街，日本語が通じない国での生活，口馴染みのない料理，全てが初めての経験でした．何をするにも新鮮で，胸が高鳴っていた幼少の頃の感覚を久しぶりに感じることができ，日々新しいことに挑戦し続ける人生を送りたいと思いました．本研修では，ベトナムの人々の自国愛，周りの人々を幸せにしたいという気持ち，成長したいという意欲などベトナムの方々のそれぞれの想いに触れ，多くの価値観に出会い視野を広げることができました．私は周囲の意見に流されやすく，色々な方の意見を聞くと，自分がどうしたいのか分からなくなります.「自分がやりたいこと」と「周囲の方々が求めていること」が混同しているのだと思います．また，自己を抑えることで，無意識に自分を守ろうとしているのだと思います．4 月から始まる進路活動では本研修で広がった視野を活かし，自分はどうしたいのか，どう生きたいのか，後悔することがないよう，自信をもって選択していきたいです．

私たちは研修中，毎日研修日誌に感謝したことを記入していました．1 日を振り返りながら日誌を書くことで，私たちは毎日多くの方々に支えられて生きていることを実感しました．サポートしていただけるのは当たり前ではなく，とても有難く幸せなことです．常に素直な心，謙虚な心をもち，感謝と笑顔を忘れずに応援される人になれるよう，日々励みます．そして，「今」を一生懸命生きていきます．

▲バイクで溢れた街

▲ホーチミン市の夜景

▲ベトナム料理

4. 謝辞

本研修において，お忙しい中懇切丁寧にご指導くださったチョーライ病院，フエ医科薬科大学の関係者の方々に深く感謝いたします．また，暖かく見守ってくださった松尾先生、水田先生，霜村先生，石田先生，事務の方々に心より御礼申し上げます．最後に，本研修に関わってくださった全ての方々に感謝申し上げます．

2022 年度 ベトナム研修 報告書

医療科学部　放射線技術学科　3 回生　　山本　萌花

2023 年 3 月 12 日から 23 日までの 12 日間に渡るベトナム研修に参加しました。本研修の内容について報告します。

「目的」

2022 年 4 月に開催された、本学とベトナムの学生によるオンライン交流会に参加した際に、母国語が異なると英語の発音が大きく異なることを知った。英語は世界共通語であり、ベトナム英語と日本英語に差はないと考えていたが、ベトナム英語には特有の訛りがあり聞き取ることが難しかった。この経験を通し、自分にとっての当たり前は自分を中心とした狭い世界でしか通用せず、世界は私の知らないことで溢れていることに気づいた。そこで、未知の体験を通して新たな価値観を得て「自分が理想とする診療放射線技師像を見つけたい」と思い、本研修に参加した。

「チョーライ病院」

チョーライ病院は、ベトナムの大都市、ホーチミン市に所在する国内最大級の国立病院である。ホーチミン市でサイクロトロンを保有する唯一の病院であり、ベトナムで PET/CT 装置を有する他の 2 施設に放射性医薬品を供給している。本研修では、MRI 検査、単純 X 線検査、マンモグラフィ検査の実習をした。

MRI 検査の実習で基準線について質問したが、うまく伝えられなかった。しかし、ベトナムの方々は何度も聞いてくださり、英語力が未熟な私のために図やイラストを作成して丁寧に教えてくださった。相手の立場に立って考えてくださるベトナムの方々の温かさに触れ、彼らのように日頃から思いやりを持って行動する人になりたいと思った。

偶然にも、ホーチミン医科薬科大学の診療放射線技師を目指す学生の臨床実習期間と重なった。彼らは検査の目的や根拠、病気の特徴に至るまで詳しく説明でき、臨床に必要な知識を習得していることに驚いた。これまでの私の学習は講義内容の暗記が中心であり、身に付けた知識を臨床でどのように活用するか、という視点が欠落していた。彼らの「目的意識が明確な学びの姿勢」を目の当たりにし、自分の不甲斐無さに気づき悔しさを感じ

た。これからは学びの幅を広げるために積極的に質問し、講義で身に付けた基礎知識を臨床においてどのように活用するかを意識して学びたい。

「タンアン総合病院」

快適な医療の提供を重視したタンアン総合病院は、患者さんが安心して検査を受けられるよう、銀河をイメージした造りの MRI 検査室を有している。病院実習では、タンアン総合病院の方々に質問をする機会をいただき、英語力が未熟な私にとっては大きな挑戦であった。勇気を出して、「働く上で最も大切にしていること」を質問させていただくと、私にもわかる英語で「患者さんが医療の中心である」と答えてくださった。医療の根底は世界共通であることを改めて認識できたが、自身の語彙力不足を痛感する経験であった。4 回生の病院実習では積極的に患者さんのポジショニングや検査の補助をし、臨床で使用されている英単語を調べて語彙力を増やしたい。

「国際交流」

ホーチミン市とフエ市で welcome パーティー(ベトナムの方々から私たち)と farewell パーティー(私たちからベトナムの方々へ)を開き、本研修に協力してくださった方々と交流を深めた。パーティーでは、ベトナムの方々へ感謝の気持ちを込めて「ソーラン節」を披露した。ベトナムの方々は、日本の歴史や文化について様々な質問をしてくださり、積極的に関わってくださった。さらに、フエでは空手を習っている学生と日本武道の話で盛り上がり、私からもベトナムについて様々な質問をすることができた。社会にでれば、より多くの人と交流する機会が増えるため、ベトナムの方々のように積極的に相手と関わり、再び会いたいと思っていただけるようになりたい。

また、本研修では「相手に伝わりやすい表現」を意識して交流をした。これまで、会話では正しい文法と発音を用いた綺麗な 1 文で話すことが重要だと考えていた。しかし、ベトナムの方々が、ベトナム国花の「蓮」の種を用いた料理の説明をしてくださったとき、「lotus seeds(蓮の種)」と写真を見せつつ説明してくださったため、文章よりもシンプルな単語、ジェスチャー、写真などを用いる

ことで相手に伝わりやすくなると感じた。4 回生の病院実習には、非言語を交えた伝わりやすいコミュニケーションを意識して取り組みたい。

「まとめ」

チョーライ病院、タンアン総合病院、フエ医科薬科大学の方々との交流は、京都医療科学大学の先生方、先輩方のご尽力のもと続いてきた。さらに、滋賀医科大学医学部附属病院、京都府立医科大学附属病院、島津製作所の方々が培ってこられたベトナムの方々との交流があったからこそ、ベトナム研修が実現していることを本研修にて知り、その「絆」のもと大変貴重な時間を過ごすことができた。心より御礼申し上げる。今後本研修に参加した方々と再会する機会があれば、少しでもいただいたご厚意のお返しがしたい。

ベトナムで買い物をする際、商品がどのようなものかわからず混乱し、道路はバイクの交通量が多く信号機がほとんどないため、渡ることが難しかった。海外での生活は、想像していたよりもはるかに不安が多かった。しかし、ベトナムの方々が付き添い説明してくださり、道を渡るときには私たちが安全に渡れるように先導してくださったため無事に渡ることができた。ベトナムの方々の温かいお心に、感謝の気持ちが溢れている。海外での生活を体験して、日本を訪れる外国の方の気持ちを知ることができ、彼らが必要としているサポートや取り組みを彼らの視点で考えるようになった。本研修にて得た多くの気づきを活かし、ベトナムの方々のように、広い視野を持ち相手の立場に立って物事を考えられる診療放射線技師を目指したい。

「謝辞」

最後に、とても温かく接してくださったチョーライ病院、タンアン総合病院、フエ医科薬科大学の方々、引率してくださった松尾悟先生、水田正芳先生、霜村康平先生、石田翔太先生、京都医療科学大学の先生方、事務の方々、本研修にともに参加した京都医療科学大学の学生方に深くお礼申し上げる。

2022 年度 ベトナム研修 報告書

医療科学部　放射線技術学科　3 回生　　吉本　倫

2023 年 3 月 12 日～3 月 23 日の 12 日間、ベトナムのホーチミンとフエで研修を受けました。初の海外で多くのことに挑戦し、自分の可能性を広げたくこの研修に参加しました。飛行機から降りた瞬間、日本の夏とは異なる暑さに、私のベトナムでの大きな挑戦がスタートすることを感じました。

［チョーライ病院］

3 月 13 日～16 日の 4 日間、研修を受けたチョーライ病院は、ベトナム 3 大病院の 1 つです。X 線単純検査の外来患者数は約 5000 人/日であり，京都大学医学部附属病院の約 2 倍に相当する非常に大規模な病院です。診断部門(X 線単純・マンモグラフィ・MRI)での臨床実習だけでなく、放射線治療部門と核医学部門の見学もさせていただきました。

私達は、新型コロナウイルスの影響により、二年次の病院実習が学内実習に変更になりました。そのため、初めて臨床現場を肌で感じることができました。英語が得意ではなく、質問できるか不安でしたが，診療放射線技師の方々がとても親切に接してくださったおかげで積極的に質問でき、多くのことを学べました。

一般撮影では、午前中に多くの患者さんが検査を受けられていました。ベトナム南部の基幹病院の役割を果たすチョーライ病院には、遠方から多くの患者さんが訪れます。そのため、遠方の患者さんが当日に帰宅できるように午前中に検査が集中します。診療放射線技師の方は息つく間もなく働いておられ、患者さんの入れ替え時間に次の検査準備をするなど、効率的に業務をされていました。日本の病院では、どのように効率化に取り組まれているのか興味をもちました。臨床実習に繋がる学びを得られて良かったです。

MRI では、患者情報の入力と画像の編集をさせていただきました。操作方法は授業や実験では学ばず、正確に操作できるか緊張していたところ、診療放射線技師のチヨ・ウァンさんが、「何か私に手伝えることはない？」と話しかけてくれました。「操作をしたことがないから、一から教えてほしい」とお願いすると、彼は、直ぐにパソコンに向かい、周りの診療放射線技師の方々に、パソコンの操作を聞いておられました。彼の行動から、あまり操作経験がないのだと察しました。それでも、一生懸命に準備をし、私達の隣で画面を指差しながら操作を丁寧に教えてくださりました。自身がわからないことでも、相手のことを優先して行動する姿に感銘を受け、彼のように心配りのできる人になりたいと思いました。

[ホーチミン１区]

3 月 14 日病院実習後の自由時間、私は、先生たちが見守る中で海外で初の買い物に挑戦したく、メンバーとは行動を別にして、松尾先生・霜村先生・石田先生と 1 区に行くことを選びました。1 区はホーチミン市の金融・商業・行政の中心であり、高層ビルや高級ホテルも多く、大阪のような街並みで、とても活気がありました. さらに、フランスの植民地時代の名残で、ヨーロッパ風の建築物もたくさんある魅力的な街でした。

1 区に着いて、まずカフェを訪れ、初めての注文と支払いをしました。注文した商品が売り切れており、理想とは異なる状況に焦りましたが、臨機応変に注文を変更することができました。ベトナムドンは 100 から 500,000 ドンまで 12 種類もの紙幣があるため、支払いではどの紙幣で支払えば正しいのか戸惑いましたが、店員さんの支えのもとで正しく支払えました。初めてのことに挑戦する際には周りの力を借りても良いことを学びました。

ベトナム講座でチャムさんから、ベトナムでスリの被害が多いことを伺ったため、道端でのスマートフォンの使用を控えていました。スマートフォンを使わずに目的地まで辿り着けるか心配でしたが、目印になる建物を覚えることを松尾先生が教えて下さいました。後日、学生だけで 1 区に訪れた際も、見覚えのある建物を頼りに目的地まで行くことができました。スマートフォンに頼らずとも、どうにかできることを知り、ベトナムの方に自ら話しかけられるようになりました。

1 区には、日本食のお店も多くあり、先生方と夕食に焼肉を食べました。先生方との食事は初めてで、少し緊張しましたが、就職活動や私生活の悩みを快く聞いて下さり、アドバイスまでいただき、楽しく過ごさせていただきました。また、いつもは水田先生が松尾先生にツッコミをされることが多いですが、この時は霜村先生が、間髪を入れずに松尾先生にツッコミをされる新鮮な光景も見られました。

この日の自由時間で自分だけの思い出を作れたため、この選択をして良かったと思っています。旅行とは違い、海外研修はみんなで協力し学び合う場なので、自分の希望を優先することは難しいですが、自由時間は無理に人に合わせず、自分の気持ちを優先でき、後悔なく楽しく過ごせると実感しました。

[フエ医科薬科大学]

3 月 19 日～3 月 21 日の 3 日間、フエ医科薬科大学の学生と交流しました。

Welcome パーティにて, 私達はソーラン節を、フエ大学の学生は東京盆踊りを披露しました。ソーラン節がフエの学生に気に入ってもらえるか心配でしたが、はっぴに着替える時から、「素敵だね」と楽しそうに声をかけてくれ、自信をもって踊ることができました。一方、フエの学生が、日本の曲のダンスに挑戦してくれ嬉しく感じ、今後の研修では、ベトナムの曲に我々が挑戦してもきっと喜んでくれると思いました。

人見知りな性格であるため,ベトナムの方々が自分を受け入れてくれるか不安でしたが、笑顔を意識すると自然と仲良くなり、ベトナムの友達がたくさんできました。私を特別に想ってくれる親友もでき、翌日、彼女に手土産をプレゼントしました。出国前に、私はフエの学生に喜んでもらいたくて、ベトナム語で書いたメッセージを、巾着袋にお菓子とともに入れてプレゼントする予定でした。親友がバイクで帰る前に渡したので、その場ではメッセージには気付かれませんでしたが、数時間後、手土産に関する喜びのメールが届き、とても嬉しかったです。物だけでなく、メッセージなどの工夫で想いを届けることは、人と付き合う中で大切なことだと学びました。

昼食やホテルに戻る際、フエ大学の学生が運転するバイクの後ろに乗って移動しました。日本ではバイクは道路の端で縦に 1 列に並んで走るイメージですが、ベトナムではバイクが主な交通手段であるため、バイクが道一杯横に広がって走っていました。バイクに乗ることが初めてで、接触や衝突で怪我をしないか不安でした。ベトナムの親友に「怖くないの？」と聞くと、彼女は笑顔で「大丈夫だよ。私があなたを連れていくから」と言ってくれました。彼女のバイクの後ろに乗ると、スピードを抑え、安全に運転してくれました。そのおかげで恐怖は安心に変わり、爽快な気持ちでバイクに乗ることができました。不安や緊張などの気持ちは隠さず、素直に伝えることで、相手は対応してくれることを、実践で学ぶことができました。

［最大の挑戦］

私にとって、この研修の最大の挑戦は、チョーライ病院で原稿を持たずに日本について発表することでした。出国前の壮行会で山本先生から「原稿を完璧に覚えていなくても、アイコンタクトをして伝える方が良い」とアドバイスを頂き、発表前日まで、何度も声に出して原稿を読み覚えました。とはいえ、発表直前、セリフが飛ばないか心配していた時、女性の診療放射線技師のタンさんが「try」と言ってくれて、その一言が励みになりました。本番では、何度か単語を言い忘れましたが、発表が終わってから、一緒に研修に参加した本学学生や先生が「すごかった」と褒めてくれて、タンさんにも「nice try」と言ってもらえました。ベトナムの方に私の頑張りを届けられて嬉しかったです。相手の目を見て伝えることに挑戦して良かったと心の底から思いました。

［まとめ］

ベトナム研修を受けて良かったと思っています。選択し挑戦することは、自分に責任を持つ重大なことですが、「やらない後悔よりやって後悔」の方が、自分自身の成長にも繋がると、この研修で強く感じました。これからは後悔や失敗を恐れず、やりたいことにとことん挑戦する自分に変わりたいです。

ベトナム研修にチャレンジしようか悩んでいる後輩の方には、挑戦することを強く勧めます。私自身、挑戦は「人生を変えるきっかけ」になることを、本研修にて身をもって経験しました。今の自分を変えたいと思っている方は、ぜひ参加してください.

［謝辞］

私達を引率してくださった松尾先生、水田先生、霜村先生、石田先生、たくさんのことを学び、思い出を共有した 11 人の本学の学生、困ったときにすぐに連絡をくれた家族、そして、親切に私と接して下さったベトナムの方々には、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。初日にホテルで不安のあまり１人きりで泣いていましたが、皆様のおかげで、いつの間にか不安は薄れ、笑顔で残りの研修期間を過ごすことができました。

事務の村上さん・藤尾さん、旅行会社の西出さんのおかげで、安心して研修期間を過ごすこともできました。

こんなにも多くの人に支えられたおかげで、ベトナムでの研修は、人生の思い出の１つになりました。誠にありがとうございました。